

## 入選

### 私の親切の基準

東京都 頌栄女子学院中学校 一年

深石 唯月

今思えば私は、小さいころからお母さんに、

「お友達が困っていたら、助けてあげてね。逆に自分が困っていたら、きっと誰かが助けてくれる。」と、言われていました。私はお母さんの言葉をよく聞いていたため、小学校のあらゆる場面で実行しようとしていました。

例えば、となりの席の友達の筆箱が机から落ちて中身が散乱してしまったら、いっしょに中身を拾ったり、同じ時間に下校している友達のランドセルのふたが開いていたら、「開いているよ。」と声をかけたりしていました。

月日がたち、小学4年生になったときの新学期の初日、同級生と思われる子が、両手がふさがっている状態だろうかを歩き、同じ教室に向かっていくのを私は見つけました。

私はすぐかけよって、

「私、荷物……。」と言いかけたしゅんかんに、

「自分で持つから、いい。」

と、その子に言われました。

その子は静岡から来た転校生で、私たちはすぐに仲良くなることができました。ですが、小学4年生だった私は、なぜ彼女が「自分で持つから、いい」と言ったのかわかりませんでした。

私は中学生になって、その転校生と違う中学校に通っていますが、この作文を書いたことによって、長い間自分が忘れていた彼女の言葉を思い出しました。

小学生の頃は、親切とは相手が困っているときに、自分がしてもらって嬉しいことを相手にしてあげることだ、とっていました。でも本当の親切とは、思いやりを持ち、相手の身になってその人のためにつくすことである、と私は今思っています。

自分と相手は違う人間であるため、親切の基準は世界中で一つひとつ違うと私は思います。なぜなら、自分が親切だと思って行ったことが、相手にとっての迷惑行為であったり、自分が何も思わずに行ったことが、相手にとってとても嬉しい行為であったりするからです。

私は自分の中での親切の基準が、彼女の「自分で持つから、いい」によって変わったのだ、と思いました。お母さんは何で、私が小さいころから、

「お友達が困っていたら、助けてあげてね。逆に自分が困っていたら、きっと誰かが助けてくれる。」と、私に言い聞かせていたのか。

今でもお母さんの声が、耳の奥に響いています。